

# かんぱくししまい 関白獅子舞

昔、下野の国高座山麓西山に本拠地をかまえた蔵宗・蔵安という兄弟がおりました。この蔵宗・蔵安兄弟は千余人の賊徒を従え、逆面、横倉、中里などに砦を築き、この地一帯の人民を牛馬の如く鞭打ち、金銀を奪ったり、朝廷への貢物を掠奪したり暴虐の限りをつくしていました。人々はこの蔵宗・蔵安兄弟を、

「ありや、羽黒山の鬼にちげいねえぞ。」と、恐れおののいているばかりでした。

これを聞き付けた朝廷では藤原利仁に勅旨を下し、蔵宗・蔵安賊徒退治を命じました。延喜十二年鎮守府將軍藤原利仁公を総大将とする軍勢は、はるばるこの地（上河内）までやって来たのです。

まず、現在の田原の地に陣地を置き、着々と討伐のチャンスがうかがって行きました。（時の天皇より討伐の任を命ぜられ、この地に最初の陣をしいたことから、この地を天王



原と呼ぶようになったと伝えられている。

延喜十二年五月六日総大将藤原利仁公は時期到来とばかり、

「これより出陣！」

と、旗をひるがえし、戦いの火ぶたをきっておとしました。逆面、横倉、中里にかまえ

た蔵宗・蔵安兄弟の砦をつぎつぎに討ち破り、進軍を続けたのでした。

中里の砦を討ち破った時に勝利の旗を掲げたところが、現在の入畑（旗入り）だった

といわれています。また、その時ただ一本戦火を免れた老木がありました。以来、こ

こを一本木と呼ぶようになったということです。

利仁公は、同年六月十五日高座山の蔵宗・蔵安兄弟の本拠地に軍を進める断を下した

のでした。

時まさに初夏でした。利仁公はある夜、天を眺め雪が降ることを予感し、家来に命じ

て多くの櫓を作らせました。そして、数人の家来を呼び、

「天まさに雪か。」

と、問いましたが、家来たちは、この時期に雪など降るはずがないと思ひ、

「天は晴れております。雪など降りませぬ。」

と答えました。

すると、利仁公は怒って、剣を抜き家来を切り殺してしまいました。しばらくして、

再び家来を呼び、同じ事を問いかけました。すると家来たちは、恐れおののいて、

「雪は降りまする。」

と答えました。利仁公は大いに喜びました。家来たちは六月に雪など降るはずがあるものかと思っていきましたが、どうした事か、夜半になり突如として、利仁公の予感どおり、この地一帯に大雪が降ったではありませんか。その雪は明方まで降り続いたのでした。

利仁公の軍勢は、櫓に乗って進撃し、蔵宗・蔵安の本拠地に攻め入り、ついに賊徒を討ち果たすことができたのです。さすがの蔵宗・蔵安もこの時ならぬ大雪では、利仁公の軍勢といえども攻めてはこられぬであろうと、油断をしておりましたのでした。

当時、この乱は平将門の乱と並ぶ下野の二大乱といわれるほどであったと伝えられています。

利仁公は賊徒平定後、病に倒れ他界してしまつたのでした。利仁公の夫人や仕えた姫君たちは、あまりの急な殿の他界に、嘆き悲しみの



日々を送っていましたが、まもなく殿の後を追うように、この地で生涯を閉じてしまったのでした。

この夫人や姫君たちを哀れみ祀ったのが、現在の姫宮神社で、別名浮島の社ともいわれております。また、この辺りは、姫君たちが利仁公の死を悲しむあまり毎夜泣きはらしたことから、泣き野が原とも、泣いだ原ともいわれており、いつしか前田原と呼ぶようになったのだと伝えられています。

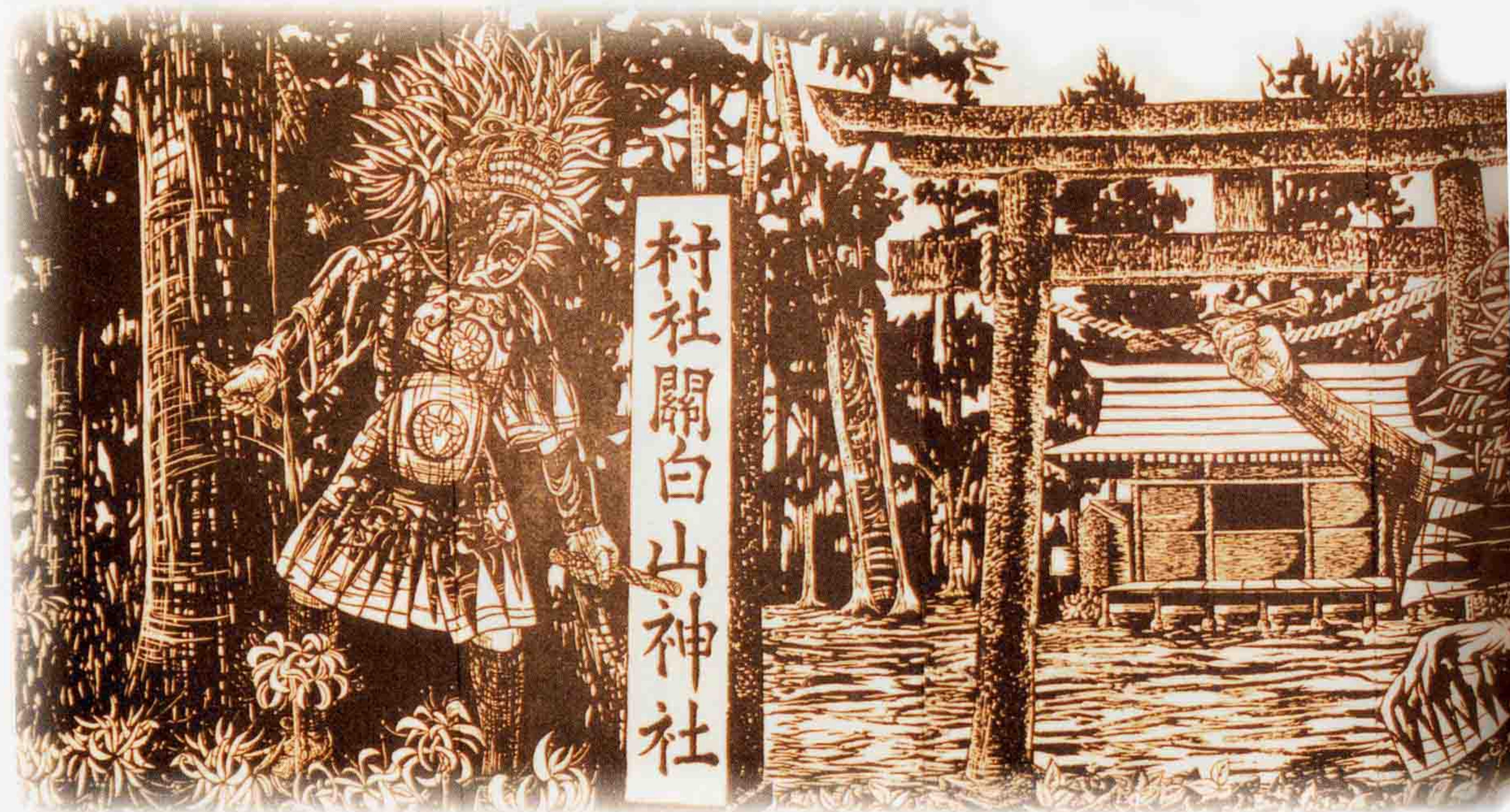
さて、利仁公の突然の死に家臣たちは、

「殿の葬儀をせねばなるまい。」

と、泣く泣くその準備をはじめました。ところが、どうしたことが、一天にわかにかき曇り闇夜の如くなり、ひどい嵐となってしまうました。

困り果てた家臣たちは、

「これは、一体どうしたことじゃ。」



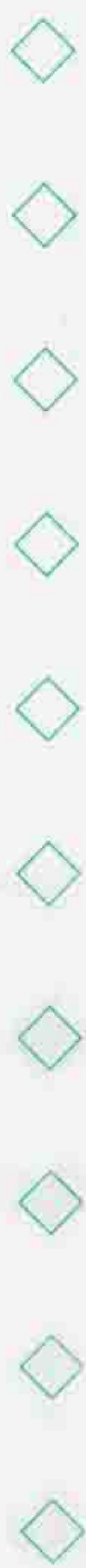
表紙原画（関白神社）

とただおろおろするばかりでした。

「これは何か悪魔の仕業に違いない、悪霊神がついているのじゃ。」  
と思ひ、家臣は、悪魔の消滅を期して宇宙の麒麟を形どつた頭三つを刻み、これを御獅子と称して家臣三名にかぶらせて舞を舞わせたところ、たちどころに暗雲が消え、晴れてしまつたのです。

この時舞つた舞が関白獅子舞の起源となつたのです。藤原利仁公の功德をいついづまでも忘れることのないよう、人々の願いをこめて代々伝授され、毎年八月十五日、関白神社境内で祭礼の際にこの獅子舞が奉納されているのです。（現在は八月の第一日曜日に行われていきます。）

このことから、この地が『関白』と呼ばれるようになったのだと伝えられています。



この舞については、日光東照宮造営のおり舞いしましたがそのすばらしさに徳川家より「天下第一」の称号をいただき、現在では、天下第一関白神獅子舞として栃木県の無形文化財に指定されています。